

生涯学習開発財団シンポジウム 2014

多元的共生社会におけるコミュニケーションカシリーズ

第6回「ワークショップデザイン×コミュニティデザイン」

講演：山崎亮氏（studio-L 代表、東北芸術工科大学教授、京都造形芸術大学教授）

インタビュアー：中脇健児（特定非営利活動法人ワークショップデザイナー推進機構理事）

ナビゲーター：蓮行（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任講師、劇作家）

〔日時〕 2014年12月7日（日）17:30～20:00

〔場所〕 梅小路公園緑の館1F イベント室

「多元的共生社会におけるコミュニケーションカ」シリーズの第6回は京都で開催されました。シリーズの趣旨は、これからの社会を生涯学習社会として位置づけ、その有り様を“コミュニケーション”、“アート”、“学び”の3つの視点からあきらかにしていく試みです。

—

0. 序

第6回は、多くの現場でコミュニティデザインを手がける studio-L 代表の山崎亮氏をお招きし、氏の関わったまちづくりの実例をお伺いします。コミュニティデザインの現場ではどのようなワークショップが行われているのか、ワークショップデザインで起こりうる現象が発生しているのか、講演とクロストークおよび参加者からの質疑応答を交えて、考えていきました。



1. オリエンテーション

山崎氏より「参加者のニーズに沿った話をしたい」という提案があり、中脇が講演参加者へのオリエンテーションを行いました。まず初めに「山崎氏の講演を聞いたことがある人、無い人」の質問を投げかけ（それぞれ1対2ほど）、その後「今回の講演で山崎氏に質問したいこと」というお題で、客席の前後左右の4、5人の見知らぬ参加者同志で話し合っていました。10分ほどでそれぞれ出たことをあらかじめ渡した紙に書いてもらい、集めました。

- ・仕事になりはじめたころの話が聞きたい
- ・たくさんのプロジェクトを同時にまわすコツは？
- ・山崎氏の一週間
- ・学生時代の体験で今につながっていること

こういった質問から話題が広がっていきました。



2. studio-L 山崎亮氏講演

<仕事になりはじめたころの話>

山崎氏が独立されたのは建築の依頼自体が減少していく時代でした。2002年から兵庫県姫路市の家島に通いまちづくりに携わりますが、3年間はギャランティはなく、手弁当で通われていたそうです。2005年にまちづくり研究会の予算がありますがこれも交通費のみ3000円だったとのこと。同時期にstudio-Lを設立。2009年まで家島でのコミュニティデザインに関わります。そして、家島での仕事が評価され2007年には隠岐諸島の海士町からコミュニティデザインの依頼が来ました。しかし、軌道に乗りはじめたのは2010年頃とのことでした。

<沼田町の事例紹介『つくるデザイン』>

また山崎氏はコミュニティデザインを「つくりたい」デザインと謳うことがありますが、実際には「ものをつくる」という仕事の中からコミュニティデザインを発揮していく仕事もあります。そこで、まずはこういった「つくる」タイプの事例から紹介されました。北海道の沼田町の事例です。コンパクトシティをめざす北海道の沼田町。広範囲に広がった市街地を集約することで医療・除雪等のインフラのリストラを行い、財政を立て直すのが狙いです。住民の移住が必要なこのプロジェクトは「先祖の土地を離れることはできない」と賛同が得られず難航することが多いのですが、沼田町の場合は北海道という土地柄、開拓民として明治期に入植してきたという比較的歴史の浅さからか、比較的スムーズにコンパクトシティ計画は受け入れられたとのことでした。そんな中、2億円の赤字のあった病院を無床の診療所にし、中学校跡地に診療所と福祉施設やその他の機能を備えた施設の建設計画が立ち上げられます。

・インプット「これから塾」→アウトプット「つながる塾」

複合施設の内容を話し合う前に、参加型勉強会である「これから塾」が住民参加型で開催されました。沼田町役場の職員がファシリテーターとなり、町の現状を学びます。まずは町の情報のインプットを徹底的に行うことが、次のアウトプット「つながる塾」への備えになるとのことでした。

「これから塾」での勉強会の後に開かれたのがアウトプットとなる「つながる塾」のワークショップでした。中学校跡地に建設予定の複合施設の予算のシミュレーションを、スペースや予算を可視化できるような模型を使い、実際に1期工事と2期工事にわけて行うというものです。

ここで、山崎氏が強調されたのがこの模型についてでした。studio-Lのスタッフが部屋いっぱいに模型を並べて立体造形を製作している写真が紹介されました。『つくる』ワークショップでは、具体的なものを手に取らないと参加者がその場でつくることができません。そのため、こうした事前の準備が重要だとのことでした。

そうした準備やインプットからアウトプットへの流れもあり、ワークショップでは前向きなプランが作られました。「あれもこれも欲しいけどこの予算では難しいな」という声から聞こえたそうです。

・中脇からの質問

中脇「参加者を集めるのは大変だと思うのですが、この事例での行政と住民の割合はどのくらいでしょうか？また、途中で参加しなくなるような人はいないのでしょうか？」

山崎氏「行政・住民で1:1ほど。途中でやめる人は1割程度です。参加者は公募ですが、呼びかけても簡単にあつまるとはならない。とにかく町に出向き、話しをして仲良くなり、足を運んでもらうように呼びかけます。」

中脇「ワークショップ実施の際に、シナリオというか、ある程度の流れというか、合意形成点に導くような筋書

きを用意されたりすることはありますか？」

山崎氏「こちらが「いい」と思っている感覚を伝えることはあります。ただ、出て来た膨大な意見は漏らさずリスト化しています（リストを投映）。それが我々の仕事ですから。ここから解決の方向性を模索するのです。」

中脇「まさに協働の現場ですね。行政職員にファシリテーターとしてのスキルを求めることはありますか？」

山崎氏「『今までとおりの進め方ではダメだ』という意識の変化から職員研修を依頼されることはあります。」

<つくらない「つばめ若者会議」>

ふたつ目の事例紹介は、建造物等形に残るものを「つくらない」仕事でのコミュニティデザインの事例を紹介していただきました。新潟県燕市の「つばめ若者会議」の事例です。3年計画で「20年後の燕市を考える」概ね40歳以下の若者が集まった会議体を運営するという事業です。

まず、燕市のこれからの考えたいという若者を募り、燕市の「いいな」と思うところをワークショップで話し合ってもらいました。それを発表します。その後、9つのチームを結成し、アクションプランを作成、市長や市民の前で発表会を行いました。この発表会も若者達だけで運営され、「つばめ若者会議」と名付けられました。今現在もプロジェクトは進行中で、20年後の燕市の幸福を実現するため燕市の若者たちが動いているのです。

様々な活動をグループにわかれて取り組む「つばめ若者会議」ですが、試行錯誤の中「一定動いて難しければ、チームは解散しても良いというふうにしよう」「その時は、ちゃんとこのチームの推移を報告してもらい“看取る”ことをしよう」とルールや役割を自発的に決めて動きも生まれたそうです。

「つくらない」事案であり、今進行中のプロジェクトでもあるので、具体的な成果であげられるようなものはないのですが、ひとつ言えることは市長と若者との間が縮まったことや、自発的な行動が生まれていることにプロジェクトの手応えを実感するそうです。

<たくさんプロジェクトを同時にまわすコツは？>

最後にプロジェクトを同時にまわすために必要なことについて話されました。現在、studio-Lでは65の案件を25人、(うちプロジェクトリーダー11名)で動かしています。もちろん、すべての現場に山崎氏が同席できるわけではありません。自分がいなくてもまわせることが、組織づくりでもまちづくりでも大切なことだと話されました。地域の人から、「必要無い」と言われるということが、仕事が終わったということ。

studio-Lでは、プロジェクトリーダーとなるスタッフが現場を任されています。それが組織の強さに繋がっているのです。



3. クロストーク、質疑応答

後半は運行・中脇による質問や参加者からの挙手による質疑応答を交え、クロストークではワークショップとコミュニティデザインの話題に限らず、山崎自身への話題にも触れながら、終始和やかな雰囲気で行われました。



以下、いくつかの参加者からの質疑からのやりとりをご紹介します。

Q「コミュニティの単位を市で捉える話が多いですが、〇〇沿線や、〇〇流域といった自治体を横断していたり、連携を図る事例はないですか？」

A

運行「市町村単位の統一した財布がないですから……。たとえば京阪沿線では中之島の再開発を行おうと地域の企業に声をかけているが、互いの思惑が異なるんです。意思決定のペリオドを打つ難しさがありますね。」

山崎「五島列島半泊地域の事例があります。……。5世帯9人という小さな集落なのに、宗派が異なることを理由に、挨拶もしない状態だったんです。ここに訪れたのですが、観光客の宿泊場所の話になった際、口を効かなかった宗派の人間が会話を交わしたんですね。貴重な瞬間でした。」

Q「山崎氏は島のコミュニティデザインを多く手がけられていますが、島独特だと感じることはありますか？」

A

山崎「コミュニティの力が強いですね。挨拶の仕方一つとっても、難しいです。」

Q「小豆島での事例を教えてください……」

A

山崎「依頼があったときにこちらから条件を出しました。島の人たちがアートを作るという形だったら引き受けると伝えたんです。島の人って廃棄物の利用が上手いんですよね。すぐに物が手に入るわけじゃないからなんですよけれども、冷蔵庫が食器棚になっていたり（会場笑）。そこで、廃棄物を使ってアートを作ることになりました。島の名品の醤油のうち酸化した醤油、そして大量に余っていた醤油たれ瓶。（それぞれ写真を見せる）これ、

8万個もあるんです。お弁当箱の規格が変わると、たれ瓶もそれに合わせて規格を変えなければいけない。それでこんなに在庫として捨てるに捨てられず放置されていたんです。このたれ便に酸化してつかいものにならなくなった醤油を様々な濃度に薄めたものを入れてアート作品（光が醤油のきれいな色を映し出すステンドグラスのような作品の写真）を作成しました。この、8万個入れる作業をいろんな住民の人に手伝っていただきました。」



ここで時間となり、今回のシンポジウムは終了となりました。

4. 所感

今回は京都駅近く梅小路公園内に会場があり、とてもいい環境でした。窓の外には池が広がり部屋の中にも池から続いた緑が生い茂っていました。参加者数に対して手狭かとも思われたのですが、実際はスピーカーと参加者との距離が近く、とてもアットホームな雰囲気だったと思います。そのおかげか、参加者も聞き手のふたりも氏の懐に深く入るような言葉をなげかけることができ、思わぬ話を山崎氏からお伺いすることになりました。

仕事になるまでの収入に結びつかない時代のお話や、「面白くないですよ」と前置きされていた失敗談については会場内は多いにわいていました。とはいえ、最後に「今は、失敗しそうな段階でリカバリーする。やはり、期待されている成果を生まなければならないですから」と語る姿はとても印象的でした。

活動を継続されてきたからそう感じられるのでしょうか。studio-Lの仕事のまわし方、スタッフ育成については組織論として語られていましたが、ワークショップの現場で「やりっぱなし」で終わらない、継続していくための手だてとして、大変参考になるお話でした